

研究開発の概要

1 研究開発の概要

研究開発構想名

成田発！2020年に向けてアジアとの共生を担うグローバル・リーダーの育成

1. 目的

世界中が注目する東京オリンピックが開催される2020年に向けて、アジア諸国・地域の人々と互いを尊重しつつ、平和的・健康的な生活を営みながら、協働してアジア全体、ひいては世界の持続的発展に貢献できるグローバル・リーダーを育成する。

2. 7つの能力・資質

課題発見・問題解決能力
論理的思考力
多様な人々と協働するコラボレーション能力
相互理解を図るコミュニケーション能力
具体的な解決を図る企画力
異文化に対する受容性
日本文化理解と発信力

3 研究開発の構成

研究開発1 GS 課題研究

研究開発2 GS プログラム（課題研究以外の研究開発）

全教科の授業改善による生徒主体のアクティブラーニング

日本文化発信プロジェクト

ボランティア活動・インターンシップを通じた具体的な解決を図る企画力の育成

海外留学・海外大学進学，国内スーパーグローバル大学進学支援

2 研究開発の推移

平成 27 年度 (2015 年度)

1. 1 年次の主な取り組み

- (1) 研究体制の立ち上げ，外部組織との連携
- (2) 課題研究基礎(1年)の教材開発・実施(前期：SGH 講演会，後期：グループ活動・中間発表会，PPDAC サイクルの作成)
- (3) 国内フィールドワークの企画・実施(候補地検討，視察，事前・事後指導)
- (4) 海外フィールドワークの実施計画(候補地検討，現地視察，参加生徒選考)
- (5) GS プログラムの企画・実施
- (6) 平成 26 年度 SGH 指定校の視察

2. 1 年次の成果

- (1) 生徒における意識・行動面での変容を確認
 - グローバルな社会課題への興味・関心の高まり
 - グローバルな社会課題への参与意識の芽生え
 - 視野の広がり・多角的な視点・価値観の変容
- (2) 探究型学習に対する生徒の積極性を確認
 - みずから課題を設定する意識
 - 協働学習・プレゼンテーションへの姿勢
 - 自己認識の深化，無知の自覚
 - フィールドワークの大切さ

3. 1 年次の課題

平成 27 年度の課題	平成 28 年度での改善点
(1) 研究推進体制の再検討	(1) 研究推進体制の構築 (コア委員会・課題研究委員会と 6 つの作業班)
(2) 課題研究 学習指導計画の見直し 研究手法の指導徹底 反省的思考の導入 生徒間格差の解消	(2) 課題研究 外部講師の導入(2 年は年間 4 回，1 年は年間 3 回) 学習計画の再検討 (SGH 講演会の縮小，グループ活動の時間確保) 研究手法の指導徹底
(3) 研究開発に関する評価方法の検討	(情報の信頼性・典拠の明示，活字情報の活用)
(4) GS プログラムの推進	(3) 評価方法の改善(データ分析を中心とした評価) (4) 情報発信の充実

平成 28 年度 (2016 年度)

1. 2 年次の新たな取り組み

- (1) 課題研究発展 (2 年) の教材開発・実施 (研究支援, 校内発表会・相談会, レポート等)
- (2) 海外フィールドワークの企画・実施 (事前・事後指導, 次年度計画, 参加生徒選考)
- (3) 第 1 回 SGH 研究発表大会の企画・実施
- (4) 研究発表大会への生徒派遣

2. 2 年次の成果

- (1) 生徒意識調査から明確になった点
 - 7 つの資質・能力に関する数値の伸び
 - 成長を感じられない生徒の主な要因 (課題設定, 人間関係, 個人の意識)
 - 自己評価ルーブリックの相関関係
 - 「課題研究は有意義である」という認識
 - 視野の広がり・多角的な視点・価値観の変容
- (2) 外部連携の広がり
 - 外部講師 (課題研究) の広がり
 - 大学との連携強化
 - 企業・国際機関等との連携強化
 - 成田市との連携強化
- (3) アクティブラーニングの浸透
- (4) 英語力の向上 (英語検定取得者)
- (5) 波及効果
 - 生徒への波及効果 (グローバル化・国際情勢への関心の高まり)
 - 教員への波及効果 (教科指導との相乗効果, 教員自身の意識変容)
 - PTA 活動への波及 (研修活動, マラソン大会)

3. 2 年次の課題

平成 28 年度の課題	平成 29 年度での改善点
(1) 理念共有の必要性 (2) 課題研究 「十分で適切な調査」「多角的な分析・理論への統合」「議論を深める質疑応答」の充実 反省的思考 (昨年度の課題) レポート指導の改善 (共同作業の難しさ) プログラム改善	(1) 全ての職員が SGH 事業に関与 (2) 課題研究 2 年課題研究に「ポスターセッション」を導入 [9 月] (「明確な課題設定」および「議論を深める質疑応答」の充実をめざす) プログラム改善 (課題研究を「総合学習」と連動させ, 隔週で 2

<p>(毎週 50 分ではグループ活動が不十分)</p> <p>課題研究活用 (3 年選択) 教材開発</p> <p>(3) 指導・支援体制</p> <p>研修会開催</p> <p>職員の打ち合わせ時間の確保</p> <p>「課題研究の手引き」作成</p> <p>(4) 評価方法の改善</p> <p>(継続的な調査の必要性, 信頼性の向上)</p> <p>(5) SGH 活動と教科指導との連関</p> <p>(6) 今後の SGH 活動の長期的な展望</p>	<p>時間連続の時間を確保)</p> <p>1 年国内フィールドワーク報告会(ポスターセッション)用フォーマットを提示(伝達内容を焦点化)</p> <p>(3) 研究推進体制を再構築</p> <p>(各作業班の項目を細分化)</p> <p>(4) 評価方法の継続・データの蓄積</p> <p>(前年度との比較が可能)</p> <p>(5) 平成 30 年度以降の SGH 事業に関する検討開始</p>
---	--

平成 29 年度 (2017 年度)

1. 3 年次の新たな取り組み

<p>(1) 課題研究活用 (3 年選択) の教材開発・実施 (スピーチ, ポスターセッション, グループ学習)</p> <p>(2) ポスターセッションの導入 (1 年国内フィールドワーク報告会[10 月], 2 年課題研究中間報告会[9 月])</p>
--

2. 文部科学省グローバルハイスクール中間評価

中間評価	<p>これまでの努力を継続することによって, 研究開発のねらいの達成が可能と判断される。</p>
講評	<p>地域や専門性を生かした大学・企業人を受け入れ研究開発を全体化し, 生徒に変容を促している点が高く評価できる。</p> <p>課題研究に必要なテーマの教材作成に加え, ロールプレイ教材, 情報収集法 (質的研究手法), 海外フィールドワーク調査手法など多くの教材の作成に取り組んでいる点も高く評価できる。</p> <p>英語教育について高い成果をあげているが, 英語教育と課題研究の関連や, 英語以外の科目との連携等, 総合的・統合的な視点を持って取組をすすめることが期待される。</p>

3. 3 年次の成果

<p>(1) 生徒の意識調査から明らかになった点</p> <p>配当時間数の妥当性 (1 年生では妥当, 2 年生はやや過剰という結果が出た。)</p> <p>学習プログラムの内容について, 1・2 年生ともに肯定的であった。</p> <p>評価・検証方法の問題点 (意識調査とループリックとの相違。「7 つの資質・能力」の定義の曖昧さ。統計的な有意差の要因が不明。)</p>
--

- (2) 外部連携（大学・企業・国際機関・行政等との連携強化）
- (3) SGH 第 1 期生の進路意識への影響
- (4) アクティブラーニングの定着
- (5) 英語検定合格者の増加
- (6) 波及効果

本校への入学志願者倍率に増加傾向が見られた。

PTA 国際教育委員会「異文化研修会」で、保護者がロシア大使館を訪問。

4.3 年次の課題

平成 29 度の課題	平成 30 年度での改善点
<ul style="list-style-type: none"> (1) 「異文化受容性」と「日本文化理解・発信力」の位置づけ (2) 「7つの資質・能力」の整理・再定義 「課題発見」と「問題解決」の区別 「論理的思考力」の内容 「問題解決」と「企画力」の関係 「日本文化理解・発信力」の再定義 (3) 英語教育との連携強化 (4) 職員研修の充実 (5) 成果の普及 	<ul style="list-style-type: none"> (1) 課題研究 1年・2年の校内発表会を「ポスターセッション」に変更 [11月, 2月] (「明確な課題設定」・「議論を深める質疑応答」の充実, 及び IT 機器集中の解消のため) 国内フィールドワーク訪問地開拓 (2) 1年中間発表会 [2月] で、英語発表を導入 (グループ編成時も希望調整を行い, 16グループ (64名) が英語で発表) (3) 職員研修の実施 [9月11日 (火) 35名参加]

平成 30 年度 (2018 年度)

1.4 年次の新たな取り組み

- (1) SGH 指定終了後の教育課程に、選択科目「課題研究活用」(2年選択: 2単位)を設定。SGH5 期生 (平成 31 年度入学生) 以降が対象。
- (2) 2 年次「課題研究発展」の学習内容について、台湾修学旅行に即した教材開発に着手。SGH4 期生 (現 1 年生) より導入の予定。

2.4 年次の成果

- (1) 意識調査の結果から
調査の各数値が、昨年度と比較して有意差のある伸びを示しており、学習プログラムの改善が進み、指導体制も整いつつあることが確認された。
「コンピテンシー」「マインドセット」「問題解決」の 3 つの指標を導入し、生徒の成長が確認できる指標が明確になった。
- (2) 外部連携 (大学・企業・国際機関・行政等) との定常的な連携
- (3) SGH 第 2 期生の進路意識への影響
- (4) 生徒の英語力の向上

3.4 年次の課題

平成 30 年度の課題	令和元年度での改善点
(1) 最終年度から指定終了に向けたプログラムの改定 (2) 「共生」観念の限界 (3) 評価の難しさ 個体能力観の限界 「人間性」評価への懸念 「個人」に着目した評価の問題点	(1) 台湾修学旅行に即した学習プログラムの策定・実施(2年次課題研究発展) (2) クラス内でグループ編成を行い、以前のクラス・学科の枠を超えた編成との比較を実施(1年次課題研究基礎)

令和元年度(2019年度)

1.5 年次の新たな取り組み

- (1) 台湾修学に即した教材開発・実施
- (2) 研究開発の成果と課題を総括
- (3) 「総合的な探究の時間」の入学から卒業までの3年間の学習プログラムを検討

2. 研究開発の成果(省略)

-2を参照のこと

3. 今後の課題(省略)

-3を参照のこと